

令和 5 年度

入学者選抜学力試験問題

小 論 文 (後期)

〔注 意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は 6 ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、解答用紙 4 枚に受験番号および氏名をそれぞれ必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に、縦書きで記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点と括弧を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、語彙、漢字、構文、句読点の付け方、表現の正確さにも注意して書くこと。
7. この冊子は、持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

たとえば、あなたが住んでいる街に「ゴミ処理場を誘致する」と市長が表明したとしよう。その市長に「私が責任を持って決めたことですから」と言われてすんなり納得できるだろうか？ おそらく、「まず住民に向けて説明会を開いて、みんなで話し合ってから決めてください」と、あなたを含めた多くの住民は言うであろう。では、その話し合いはどのようにしたらよいだろうか。ここでは、社会的論争のリスク・コミュニケーションに欠かせない、集団の意思決定に関して、心理学の研究成果をもとに紹介する。

まず、一般的には、集団の意思決定の質は、個人の意思決定を平均したものよりはすぐれているが、その集団のなかで最も秀でた個人の決定には劣る場合が多いことが、実験によって明らかになっている。このように書くと、その集団（組織、社会でも同じである）で優秀な人を見つけてその人に決めてもらえば、最良の結果が得られるのではないか、と言いつ出人が出てきそうである。つまり、独裁的決定である。実際リーダーシップ論などでも、優秀なリーダーにまかせておけば大丈夫、というような議論を見かけることもある。しかし、少し考えればわかることだが、そんなことは現実的に可能でない。

その理由は二つある。第一に、私たちは民主主義的な社会に生きているのだから、一人の意思決定による独裁はそもそも許されない。これに対して、首長や議員については、選挙を通じて代表者を選んでいるのではないか、という反論が出てくるかもしれない。そして、そうやって選ばれた人が決めたことなのだからよいのではないか、と。しかし、選挙（しかも選挙は、そのやり方を変えれば結果は変わってくる可能性がある）によって選ばれることは、選ばれた人の優秀さを保証しない。つまり、社会としては、その人が最良の意思決定をする可能性に賭けるのはリスクがありすぎる。

また、上記の事実を明らかにしたのは実験によるものだから、「どれが最良の決定か」ということがわかっている状況である。しかし、現実の社会では最良の決定が何なのかあらかじめわかっているわけではないし、そもそも「誰が最も優秀な人物か」を見いだすことは困難である。たとえば、失敗してはじめて「他の人のほうが優秀だった」とか、成功してはじめてその

人が優秀であったことがわかるのである。しかも、現実場面では明らかな失敗というのは起こりにくい。(会社などでもそうだと思うが) 失敗の可能性があるときには、多くの人が協働してリーダーを支えているからである。つまり、失敗は見えにくいのだ。

さらにいえば、あらゆることに秀でている人は少ない。企業の例でいえば、創業者がいったんは成功しても、しだいに業績がふるわなくなっていくたりすることはよくある。これは時代の変化に合わせて柔軟に意思決定を変えていくようなことができなくなってしまうからであろう。

これらのことから、私たちが知っておくべきことは次の二つである。第一は、たとえある面で優秀であったとしても、あらゆる面でつねに最も優れた人物であるとは限らないし、その人に意思決定をまかせるのは、私たちの社会の仕組みからも許されない。民主主義を前提とするリスク・コミュニケーションも、みんなで意思決定をすることを求めている。

第二は、そのようにしてみんなで決めたことは、必ずしも最良の決定ではないということである。しかし、それは最悪でもない。一人の独裁者や専門家にまかせてしまえば、最悪の決定になる可能性をはらんでいる。最良ではないかもしれないけれども、少なくとも最悪の決定を避けるために、私たちは集団で意思決定する必要があるのである。

社会的論争の事態では、そもそもみんなで決めることが求められているが、ここでは集団で意思決定をすることのよい面に注目しよう。

まず、議論に参加することで、決定に対する参加者の満足感が高まる。誰か一人が決めたことよりも、みんなで話し合っただけで決めたほうが満足感が高い。(中略) 誰かが決めたルールを押しつけられてもそれに従う人は少ないが、みんなで相談して決めたルールならば、それに従う人は多いのだ。

とはいえ、みんなで話し合っただけで決めるときには、その手続きが公正であることが重要である。ここで言う「手続き公正」とは、話し合っただけで結果にいたるまでの過程や手続きの妥当性を問題としている。特に、発言の機会があることが重要である。手続き公正についての研究結果から、発言の機会があると、議論の参加者の公正感が高まることがわかっている。つまり、リス

クに関する問題についてみんなで議論することは、リスク・コミュニケーションとして重要であるというだけではなく、実際に、参加者が手続きが適正に進められていると感じることに貢献している。

リスク問題に限らず、このような手続きは、私たちの社会のいろいろなところで見ることができるといえる。たとえば、業績評価の際に上司と面談できる機会を作っている企業は少なくないだろう。これも本人に発言の機会を持たせることで、公正感を高めているのである。

手続き公正の興味深い結果の一つは、発言の機会がある場合、常識的にはその意見が採用されるほうが公正感が高まりそうに思われるが、実際に意見が採用されるかどうかは公正感にあまり影響しないということである。むしろ「発言の機会がある」ということだけでも、結果を公正なものと感じるようになるのである。

このように手続き公正についての研究結果は、みんなで話し合うときに、発言の機会を与えることがいかに重要かを示している。まとめると、みんなで話し合うことは、決定に対する実行率、公正感を高めるのである。

（吉川肇子『リスクを考える——「専門家まかせ」からの脱却』による。一部改変）

問一 「みんなで決める」ことのよさは何であると著者は説明していますか。一〇〇字以内で述べなさい。

問二 あなたの経験のなかでうまくいかなかった学級等での話し合いを、どのようにしたらよかったと考えますか。実際の事例を一つあげて、その改善のあり方をこの文章を参考にして五〇〇字以内で述べなさい。

次の文章は、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの著作『政治学』の一節である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

かくして、いまや確立された学習は、さきに述べられたとおり二つに方向づけられる。通常人びとが教えるのはだいたい四科目である。読み書き、体育、音楽、そして第四に場合によつては図画である。読み書きと図画を教えるのは、それらが生活のために有用で、いろいろ応用できるからである。これに対して、体育は勇気の徳に貢献するからである。しかし音楽に関しては、人はただちに疑問とするであろう。というのは、今日ではほとんどの人は楽しみのために与かっているからである。しかし人びとが最初に音楽を教育科目のなかに入れたのは、いくども述べられたように、自然それ自身が、たんに正しく仕事にはげむばかりでなく、善美に閑暇を過ごすことができるように求めるからである。なぜならこの善美に閑暇を過ごすところ、他のすべての出発点だからである。したがってわれわれはここでもう一度このことについて語らねばならない。

たしかにそれらの両方とも必要であるけれども、しかし閑暇のうちに過ごすことが仕事にはげむことよりのぞましく、かつその目的であるとすれば、人がなにしてして閑暇を過ごすかを探求しなければならない。もちろん遊びではない。なぜなら、もしそうなら、遊びがわれわれの生の目的にならざるをえないからである。しかしこんなことは不可能であつて、むしろ遊びは仕事のあいまに利用すべきである。というのは労苦は息抜きを必要とし、遊びは息抜きのためにあり、忙しい仕事は労苦と緊張をとまなうからである。そうであれば、こうした理由によつて、われわれは遊びを受けいれなければならない。ただし、薬のようにそれを調合して、適したときにそれを使うように注意しなければならない。というのは魂のこうした「遊びの」動きは鈍く、快さのために弛緩するからである。

しかし、閑暇を過ごすことそれ自体は、快と幸福と至福な生を含むと考えられる。これは仕事に忙殺される者には与えられず、閑暇のうちにある者に与えられる。なぜなら、仕事に従事する者は、なんらかの目的となるものをまだ所有していないので、そのために仕事をするのであるが、幸福——労苦をとまなわず、快をとまなうとすべての人が考えている幸福——は、こ

れに對して、目的であるからである。ただし、その快でもつて彼らすべてが同じものを考えているわけではない。各人はそれぞれの立場とみずからの条件に応じて快なるものを考えているのであるが、最善の人にとってはそれは最善の快であり、最善美の事柄から生じる快であるとみなされるのである。したがつて明らかに、ある種のものには閑暇のときの過ごし方を目標として学ばれ、教えなければならない。しかも、そうした教育や学習は、それ自体のためになされるのに対して、仕事を目標とする教育、学習は、必要なものとして、かつそれ自体以外のほかのもののためになされるのでなければならぬ。

先人が音楽を教育科目にいらしたのはまさしくそのゆえである。必要不可欠な科目だからではない——音楽はまったくそういう性質のものではないから——。また役に立つ科目だからでもない——読み書きが、金儲けや家政や勉学や国家に関するさまざまな活動のために役に立ち、また図画が思うに、技工の作品についていっそうよく判断するために役に立ち、さらにまた体育が、健康と力強さのために役に立つようには——。なぜなら以上のどんな成果も音楽から生じないのはわれわれにとって明瞭だからである。そうすると残るのは、それが閑暇のうちにときを過ごすためにあることである。まさしくこのことのために、明らかに先人は音楽を導入したのである。というのは彼らの考えでは、自由人にふさわしい、時の過ごし方のうちにその位置を与えたからである。

(中略)

かくして、有益であるゆえでもなく、必要であるゆえでもなく、自由人にふさわしく、善美であるがゆえに、息子たちが受けねばならない一種の教育があることは明らかである。ところでそれが数にして一つであるか、それ以上であるか、またそれらはどんなもので、どのようにして教えられるか、これらの問題はのちに述べねばならない。しかし現にわれわれはつぎの程度まで問題を前進させた。すなわち、われわれはすでに確立されている教科をもとにして、むかしの人びとからも証言を得た。音楽がこれを明かしているからである。

さらにまた、有益な事柄についても、子供はそのあるもの——たとえば読み書き——をただ有益であるという理由のみならず、それによつて他の多くの学習が可能になるという理由でも教わらねばならない。図画を教わる理由も同様に、個人的な買

物に失敗せず、物品の売買でだまされたいめでなく、むしろそれが身体の美しさを観賞できるようにさせるためである。いたるところで有益さを探し求めるのは、心の広い者、自由な者にもっとも似つかわしくないことである。

(牛田徳子訳、アリストテレス『政治学』による。一部改変)

問一 なぜ音楽を学ばせるべきだと著者は考えていますか。一〇〇字以内で説明しなさい。

問二 著者は古代ギリシアの哲学者であり、現代社会に生きる私たちとは異なる前提で物事を考えています。その点をふまえて、著者の考えを批判的に論じながら、あなたの意見を五〇〇字以内で述べなさい。